秋山記念生命科学振興財団 創設者

秋山 喜代 (1917～1996)

１，実業家としての生涯

1917 (大正 6)年四人姉妹の長女として誕生。1938 (昭和 13)年 21 歳で結婚。

1891 (明治 24)年祖父・秋山康之進が、愛生館北海道支部から独立自営し、秋山愛生館の礎を築く。1948 (昭和 23)年に株式会社が設立され、父・二代目康之進が社長に就任、三代目である夫(専務)と共に喜代も 31 歳で取締役として経理部門を担当。夫唱婦随で社業に専念し㈱秋山愛生館をさらに発展させた。

敗戦後、満州で中国人民解放軍やソ連軍の制圧、中国内戦をかいくぐる逃避行を経験し、その貴重な体験は、医薬品卸業を経営するにあたって大きな糧となった。「優良医薬品を必要な時期に必要な量を適正な価格で提供し、広く社会に奉仕し、福祉保健衛生に寄与・貢献する」という経営理念が、全社員に徹底され、救急医薬品の手配・納入だけではなく、災害等の衛生確保にも意を注いだ。小児まひワクチンを必死にかき集め、ガス壊疽という珍しい病気の薬も探して届けた。地域の保健衛生の向上のために尽力する祖父母、父母の姿を見て育った喜代にとって、「奉仕の精神」は知らず知らずのうちに内面化されたバックボーンとなっていた。

1979 (昭和 54)年、62 歳で社長のバトンを渡された喜代は、厳しい経営環境の中でますます重大になる自らの責務に決意を新たにし、社業の発展に一層精進することを誓った。

夫の終生かけての仕事を引き継ぎ、21 世紀へ向けて、地域密着営業の強化、オンラインシステムの開発等情報ネットワークの構築、 物流センターの建設を通して営業網の拡大と卸売機能の充実を図った。1985 (昭和 60)年に発表した ATLAS 計画 (秋山愛生館未来総合戦略)により、1991 (平成 3)年の創業 100 周年には売上高が目標の 1000 億円を達成。東証二部上場など数多くの業績を残し、21 世紀に向けて会社の基盤を固めていった。その翌年 6 月に 75 歳で社長を退任し、甥の秋山孝二に後を託した。

バイタリティあふれる女性として、戦後 50 年、大正・昭和・平成の三つの時代を生き、足跡を刻んだ本物のキャリアウーマンだった喜代。秋山愛生館を医薬品卸業界で有数の企業に育て上げるとともに、組合の健全運営と業界の教育指導、流通の適正化、企業の体質改善等の推進を図り、北海道の地域医療における医薬品の安定供給に貢献した。

２，一市民としてのボランティア活動

会長として忙しい毎日を送っていた喜代を支えていたのは、秋山愛生館の原点にある創業者精神であった。「小さな親切」運動などの社会活動にも熱心に取り組み、社訓でもあった「奉仕の精神」を文字どおり、身をもって実践した。また、国際化にも早くから取り組み、北海道スウェーデン協会会長として橋渡し役を務め、歓迎レセプションを催した際には各方面の人材交流の促進に寄与した。

1970(昭和 45)年から 26 年間は、経営者や専門職が集まり女性の地位向上を通して平和を願う国際奉仕団体ゾンタのエリア・ディレクターやアジア地区ガバナーを務め、今日の日本における国際ゾンタの基盤をつくった。初の日本人ガバナーとして堂々と大会を指揮する能力、高度な視点からの判断、細かいことに拘泥せず、大局的な見地からの思考にもとづく指導など、女性を感じさせない姿はゾンタに求められている理想像であり、全会員から深い信頼が寄せられ皆の心のよりどころとなっていた。

３，企業市民としての社会貢献

1987 (昭和 62)年には、私財を投じて「秋山記念生命科学振興財団」を設立し、学術の振興や道内の若手研究者の育成に大きく貢献した。この創設は、北海道大学薬学部に対する研究助成をいつの日か再開させたいと考えていた三代目秋山康之進の願いを、より公的な形として実現化したものであるが、発想の原点には秋山愛生館の社名に示される「生命を愛する」という理念が深く関わっている。喜代は、これを継承して、時が満ちた段階で、それまでの学究支援奉仕活動を飛躍的に生命科学の研究面に拡大具体化したものと思われる。

北海道に欠けていた学術研究部門の振興をと、財団を創設した先見性は、女性ならではの細やかさと男性も及ばぬ決断力そして、北海道を愛し、人との幸福を願い続けた喜代なればこその思いであり、地域社会の発展に大きな足跡を残した。 この輝かしい功績が認められ、1995 (平成７)年には保健衛生の向上と社会福祉の推進に貢献した功労で、北海道では最高の名誉である第 27 回北海道開発功労賞(1998 年より北海道功労賞に名称変更)を受賞。

４，キャリアウーマンのリーダー的存在

先見性と進取性を兼ね備え、生真面目な一面をもつ喜代が、企業経営について熱っぽく語っていた。「歴史の一頁を刻む、という言葉があります。経営者は事業の歴史を刻みます。困難を克服するところに新しい事業の歴史が刻まれていきます。企業の競争は熾烈です。新しい環境に対する適応力を失った企業は消えていきます。その中で生き抜くのは “企業のバイタリティ”にあると思います。それをやるのが、我々なのです…」と。東奔西走の活躍でスーパーレディぶりを発揮し、自立した女性として堂々たる人生を生きる姿は、社会で戦う女性にとって、心の支柱になる存在であった。

一方で、『実るほど頭を垂れる稲穂かな』を信条とし、女性特有の心遣いを感じさせる喜代は、人を差別しなかった。老若を問わず、地位を問わず、閥を問わず、ありのままに人を見て、自身が社会的に高名になっても昔とおなじように接した。何よりも「奉仕の心」を大切にし、清らかな笑みをたたえ、謙虚で、しかも凛とした信念を秘め、挨拶はもちろん何事にも手を抜くことをしない女性であった。

5，若い世代へのメッセージ

北海道を心から愛し、強い使命感と責任感を持って広く社会に寄与・貢献した喜代だが、伝統的精神を継承するばかりではなく、新しい時代に一歩踏み出していた。財団設立時の精神を最期まで堂々と貫き、次世代を担う未来を信じて財団に「物」と「心」を託したのである。

かつて「北海道に新生フロンティア精神を！」と若い世代に呼びかけたことがある。「『地方の時代』ということが提唱されて久しいが、地域の活力は地元の人々が自らの知恵と努力によって克ちとっていかねばならない課題です…。決して『怯まず』『堂々と』そして『爽やかな』チャレンジの気風の下、新しいフロンティア精神をもって今後取り組まなければならないと希(こいねが)っています」と。

道産子としての喜代が遺したものは、力強い広がりを持つものであり、それは次世代へのメッセージだけではなく、今後の財団活動を通して、地元で頑張っている若い世代がこれを「励み」としてどう生かしていけるか、という一つの大きな宿題であるのかもしれない。

若い世代が自分と同様にこの精神に学び、「健康で明るい北海道の未来像」という夢の実現に向かって歩み続けてくれることを期待して…。